

奈良県の近代和風造園

はじめに 文化遺産部では、平成21年度に奈良県の近代和風建築総合調査を受託し、建物に付属する庭園についても調査を実施した。本稿では、奈良の古代寺院の礎石の流出と近代庭園との関係に触れつつ、奈良県の近代和風造園の構成・意匠に関する特徴について、住宅、商業建築、宗教空間ごとにその概要を報告する。

近代数寄者と奈良の古代寺院 明治維新後の排仏毀釈にともなって、奈良の古代寺院は仏像などの寺宝の散逸や建物の荒廃がすすみ、衰退の一途をたどった。建物礎石も盗難や売却によって持ち去られたが、『大和上代寺院誌』(1932)に示されるように、法隆寺若草伽藍、葛木寺、慈光寺などの礎石が庭園石材として流出した場合も少なくない。円形の造り出し柱座を持つ礎石は「伽藍石」として飛石や捨石に用いられ、塔心礎は穿たれた孔を利用した手水鉢として重宝される傾向が、明治期以降、富豪邸宅の庭園に顕現してきたのである。

富豪層のなかでも奈良の古代寺院の伽藍石を庭園材料に好んだのは、茶の湯によって社交的サロンを拡大しつつあった近代数寄者であった。彼らは、石塔や石灯籠などの石造美術品の収集とともに、石材としての古さこそ庭石としての良さとする価値観に到達し、伽藍石に手を出したのである。こういった数寄者には、東京品川の御殿山に本邸・碧雲台、小田原に別邸・掃雲台を造営した益田孝(鈍翁)、横浜本牧に広大な庭園を有する別邸・三溪園を造営した原富太郎(三溪)らが良く知られる。ただし東西の巨頭としては、大阪の藤田伝三郎(香雪)と東京の高橋義雄(箏庵)を挙げなければならない。

藤田は大阪の毛馬桜ノ宮に庭園を築造するにあたり、本薬師寺の礎石の購入を企図するも失敗、その後正倉院前に置かれていた東大寺の大量の礎石を取得して庭に持ち込んだ。藤田美術館前庭には「東大寺心礎」と称される巨大な礎石のほか、山田寺の礎石も確認される。東京目白の椿山荘に配された唐招提寺の塔心礎も藤田の購入したものと思われる。高橋は赤坂の邸宅・一木庵の庭園築造にあたり、法華寺、秋篠寺などから大量の礎石を収集した。それらを飛石、景石などに悉く伽藍石として配置し、園内の建物も「伽藍洞」と命名したほどであった。

近代数寄者の庭園への大量の伽藍石の流出は、古代寺院を数多く擁した近代奈良の宿命とでもいえようか。

住宅の和風庭園 県内には、縁先手水を座敷の脇に配し、縦横に飛石を廻らして書院式露地の典型を示した土橋家庭園(香芝市)、石臼を飛石や捨石に多用しつつ軒内を自然石の飛石状石張りと真黒石の洗い出しによって瀟洒な造作を呈した堀井家庭園(桜井市)、書院式露地に花壇状の円形園地を配し、和洋折衷的な様相を強めた旧松浦家庭園(湧玄堂、王子町)、鉢前に円筒形立手水を配した秀麗な葉本家庭園(郡山市)など、近代和風庭園として良質な観賞性を備えた物件が確認される。

なかでも、庭園構成・意匠的に傑出したものは、近代の和風大邸宅が建ち並ぶ奈良市東部の水門町、高畑町などに集中している。その到達点と目される事例は、明治32年頃に完成したとされる実業家・関藤次郎が造営した依水園後園であろう。本庭園は吉城川から取水した流れや池、饅頭形の芝山を主要構成とし、遠景に若草山や春日山といった山麓景観と、中景に東大寺南大門を取り込んだ借景庭園である。特に庭園内に芝山を配置することによって遠景の若草山の芝生との強い視覚的連続性を現出し、庭園敷地を遥かに超えた開放性を獲得した点は、その借景手法の技巧性の高さを物語るものといえる。

若草山との視覚的連続性を重視した借景手法を更に推し進めたのが、津越川左岸の段丘上突端部に立地した高畑大道町所在の旧山田家庭園(ロート製薬棲霞園)、粉川家庭園、旧野口家庭園(森精機迎賓施設「高畑荘」)である。3庭園とも主屋前に優美なむくりをつけた芝生園地を大胆に配し、植栽を低く抑えて若草山や飛火野の芝生との視覚的連続性をより強調した空間構成を採用する。これらの庭園設計は、いずれも武者小路千家の家元名代を務



図70 旧野口家庭園と若草山への遠望(南から)

めた近代茶人・3代目木津宗詮が関与しており、旧山田家庭園は昭和初期、粉川家庭園は大正12年、旧野口家庭園は大正末期に築造されたものと推定される。なお、木津は同町の中村家庭園の築造も手掛けた人物でもある。旧山田家庭園、粉川家庭園、旧野口家庭園に見られるように、箱庭的な手法を脱した芝生の大胆な利用、また借景を基調とした庭園構成手法は、京都を拠点に活躍した植治こと7代目小川治兵衛や本井政五郎の作風とも共通するものであり、近代庭園作家としての3代目木津宗詮の作品・作風に関する調査研究が今後の課題となろう。

上記の庭園以外にも、閑寂な草庵式露地、小石で池泉護岸をしつらえた池庭、和洋折衷の芝庭などの各庭を建物周囲に配置・構成した志賀直哉旧居庭園（奈良市）や、主屋周りの沓脱石、飛石園路の踏分石、池泉護岸石組に豪快に巨石を用い、大正期の大石趣味を色濃く反映した吉城園（奈良市）などが、住宅の和風庭園として注目すべきものと指摘できる。

商業建築の和風造園 商業建築付属の庭園としては、密度高く飛石を配し、池内に沢飛びを打って流れ蹲踞も設置した露地的な様相が強い山田酒店「長谷路」庭園（桜井市）などが、地味だが良質な小庭園事例である。

自然環境を取り込んだ和風造園には、月日亭（奈良市）と百楽荘（奈良市）の料理旅館が挙げられる。両事例とも、本館となる大規模和館と多数の小規模な離れを若干の地形造成を加えつつ山内に配置し、その周辺に小滝・流れ・小池・灯籠・手水などをしつらえ、自然樹形の植栽をあしらって自然環境との一体化を基本とした、最小限の造園を施したものである。（栗野 隆／東京農業大学）

宗教空間の和風造園 本県では、明治後期から昭和初期にかけて、近代神宮など宗教施設の整備が実施されたが、

次に近代和風の観点から評価できる宗教造園に言及する。

橿原神宮（橿原市）は、大正元年から同4年頃まで拡張事業がすすめられた。林苑整備を担当した折下吉延は、南神門を入ると畝傍山を背景とする本殿・拝殿が現れるよう表参道の動線設定をおこない、神宮の森厳さを可視化する造園計画を実施した。また、紀元二千六百年記念行事（1940）による整備事業では、田阪美徳によって表参道のケヤキ並木の設置や芝生園地と緩曲線の園路を基調とした森林遊苑の造成がなされ、林苑の境内林も既存のマツ林から郷土樹種のカシ林に変更し、近代神宮として模範的な様相を整えた。折下吉延と田阪美徳は、近代造園学確立の端緒ともなる東京の明治神宮内外苑（1920年完成）の造営に関わった近代造園家であり、先駆的に実施された橿原神宮の林苑整備事業は、わが国最初の近代造園事業として位置づけることも可能であろう。

天理教敷島大教会（桜井市）の境内と庭園は、宮内省内匠寮を経て、のちに大阪市初代公園課長となった椎原兵市が設計した。本敷地内には八角亭周辺に展開する池庭と事務所や客室に面した枯庭が現存する。池庭の糸落ちとした滝石組や枯庭の切石と玉石とを組み合わせた沓脱石などに、椎原の細部意匠へのこだわりがうかがえる。

重森三玲が神社で作庭をおこなったものには、京都に所在する石清水八幡宮や松尾大社、大阪の豊国神社などが挙げられるが、最初期に手掛けた庭園が春日大社（奈良市）の三方正面七五三磐境の庭（1934年築造）と稲妻形遣水の庭（1939年築造）であった。苔地と砂地の境界の明快な斜線表現（三方正面七五三磐境の庭）、コンクリートによるZ字形に屈曲した遣水（稲妻形遣水の庭）からは、のちの重森の庭園作品に通底する強烈な造形志向への萌芽を十分に看取することができる。（高橋知奈津）



図71 山田酒店「長谷路」庭園の飛石意匠（北から）



図72 春日大社三方正面七五三磐境の庭（西から）